折り重ねられた時の蓄積

折り重ねられた時の蓄積

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21826952

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後, アバン, フローラ(ダイの大冒険)

最終回から２０年以上。
ヒュンケルとマァムは、ネイル村で暮らしています。
「ヒュンマCandyFes」で投稿した短編に、2シーン足して改題しました。
ヒュンケル（44）マァム（39）アバン（54）フローラ（52）
ヒュンマの子どもたち
長男（18）長女（16）次男（11）次女（6）
ヒュンマ夫婦よりも、アバンと長男の出番が多いです。
これを書き上がったあと、獄炎最新話で、若アバンが例の技を使っていたのが、個人的に胸熱でした。年をとっても使えるのは、あの技だと思います。

１ページ目のみ　2023.11.11　ヒュンマCandyFesに投稿
2024.3.22〜24　ヒュンマおこさまWEBオンリー「okosama」合わせ

折り重ねられた時の蓄積

　普段は賑やかなリビングが、この日はいやに静かだった。
　ヒュンケルとマァムが一緒に暮らすようになって、もう２０年近く。家族も増え、自宅はいつも子どもたちが笑いあう、賑やかさに満ちていた。
　だが、この日はどうしたことか。
　ヒュンケルひとりがテーブルについたリビングで、マァムは、いつもと同じように夕食後の珈琲を淹れると、夫の前に出した。
「ありがとう、マァム。」
　いくつになっても、何年一緒に暮らしても、彼は丁寧に礼を言う。
　マァムは、いつも通りの笑みを浮かべ、自分も席について珈琲を口に運んだ。
　熱い珈琲に息を吹きかけながら、マァムは呟いた。
「子どもたち、大丈夫かしら。先生のところで暴れてないといいんだけど。」
「先生は、子どもの扱いは慣れているだろう。だが、そうだな。先生はともかく、姫たちが心配だな。」
　ヒュンケルの言葉にくすりと笑みを浮かべ、マァムは、出かける際の子どもたちの姿を思い浮かべた。
「久しぶりにお兄ちゃんに会えるって、はしゃいでたものね。」
「兄弟仲が良かったからな。あいつが家を出たのはさみしかったんだろう。」
「アバン先生には感謝ね。子どもたちの面倒を見てもらってるようなものだものね。」
「そうだな。」
　マァムとヒュンケルの間には、何人か子どもたちがいるが、一番上の子は、成人しており、既にネイル村を出て、カール王都で暮らしていた。
　だが、一番下の子は、まだ幼く、夜もマァムと一緒に寝たがるような年頃だった。

だから、普段は、まだまだ家の中は賑やかであるし、ヒュンケルもマァムも、子どもたちの父として、母として、過ごす時間が多かった。
　子どもたち同士の仲もよかったのだが、一番上の子がカール王都で暮らすことになって、兄弟が離れ離れになった。
　すると、下の子どもたちが淋しがるようになったことから、アバンの計らいで、子どもたち全員、しばらくカールに遊びに行くことになったのだった。
　子どもたちについていくと言ったマァムの言葉を、アバンははっきりと制した。
—子どもたちも、たまにはご両親と離れる時間が必要ですよ。
　おかげで、ヒュンケルとマァムだけが、自宅に残されることになった。
　子どもたちのことは、アバンとフローラだけではなく、彼らの間の王女たちも見てくれていることだろう。
　ふたりきりの食卓を終え、やはりふたりきりで、珈琲を飲んでいると、時間が急激に、２０年前に巻き戻されて行くようであった。
　マァムは呟いた。
「静かね。」
「そうだな。」
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。
「これからはこういった時間が、少しずつ増えていくのだろうな。あいつらも、いつまでも子どもではない。いつか、家を出ていくんだからな。」
「そうね。」
　頷くマァムの声色に、ヒュンケルは僅かな感慨を感じ取っていた。
　彼は、尋ねた。
「寂しいか、マァム。」
「少しね。
　でも、今日はちょっと嬉しいかな。昔に戻ったみたいで。」
　そう言って、いたずらっぽく笑うマァムは、２０年前と何ら変わらない愛らしさがあった。

ヒュンケルは、感慨深げにつぶやいた。
「・・・お前は、いくつになっても可愛らしいな。」
「そ、そう？」
　マァムは、戸惑った声を上げた。ムキになって反論する。
「ヒュンケルこそ。だって、村の女の人から何回も聞いたわ。ヒュンケルって、この村に来て何年も経つけど、相変わらず素敵だって。ヒュンケルが褒められるのは嬉しいんだけど、私ばっかり年とっちゃってないかって、心配なのよ。」
　それは、彼から見るとひどくお門違いな悩みだった。
　ヒュンケルは、低い声を立てて笑うと、破壊力のあるひとことを口にした。
「可愛いがな、マァムは。」
「えっ。」
「いくつになっても、可愛らしい。」
　突然の誉め言葉に、マァムは、顔を真っ赤にした。どうしていいのかわからず、戸惑った声を上げた。
「も、もうっ！」
「怒っているのか？」
「・・・は、恥ずかしいの。」
「いまさら何を言っているんだ。」
「恥ずかしいわよ！何年たっても一緒よ！！
　・・・ううん、な、なんか、昔よりも、余計に恥ずかしい・・・。年をとったせいかしら。」
「なら、これはどうだ？」
　ヒュンケルはそう言うと、椅子から立ち上がって、マァムに近付いた。そして、背を屈める。
　すぐに、マァムの唇に温もりが宿った。
　たちどころに、マァムは、頬を染めた。
「子どもたちがいないからな。」
　そう言って、ヒュンケルは、にやりと笑みを浮かべた。その舌先がわずかに唇から覗いて、色気を醸し出す。
「ヒュンケル！」
　頬を赤らめて照れるマァムを、ヒュンケルは抱きしめた。

「お前は、いつまで経っても、俺にとっては最愛の女性だ。
　今日は、久しぶりにふたりの時間がとれるな。」
　そう言って、マァムに向けるヒュンケルの眼差しは、２０年前と何ら変わっておらず、この日も、愛おしげに彼女を見つめていた。

　カール王宮のプライベートガーデンで、王配アバンは、そこに佇む若者の背を瞳に映し、穏やかに目を細めた。
　王配の地位に就き、早２０年以上のときが過ぎた。以前から柔和であったその面に年月とともに刻まれた皺は、彼の面差しに深みと貫禄、そして以前にも増した穏やかさを添えていた。
　目の前では、弟妹たちの相手をして遊ばせている若い騎士の後姿があった。まだ真新しい騎士団の制服は、彼が騎士団員を拝命して間もないことを物語っていた。
　彼の上の妹は、彼とそう年齢が変わりないが、末の妹は、まだ手で数えられるほどの年齢であり、上背のある彼からすれば、容易に抱き上げられるくらいの小さな体だった。
「おおにい、だっこー。」
「わかった、わかった。」
　末の妹の甘える声と、苦笑気味の彼の声が聞こえてくる。そうして、ひょいと、彼が幼い妹を抱き上げた。
　その様に、アバンは笑みをこぼした。目の前の子どもたちへの愛おしさと、胸を締めるくらいの懐かしさが押し寄せてくる。
　アバンが何も言わずに彼らの様子を見つめていると、いつの前にか、隣に影が差した。
「元気ね。」
　笑みを浮かべながら、フローラは呟いた。フローラもまた、アバンの隣に並び、彼らの様子を眺めていた。
「久しぶりにお兄ちゃんに会えて嬉しいんですよ。兄弟仲が良かったと、マァムからもヒュンケルからも聞いていますからね。」
「そうだったわね。」
「たまにはこうして、下の子たちを呼ぶのもいいかもしれませんね。ヒュンケルとマァムの近況も聞きたいですし。」

「貴方がそうしたいのなら、かまわないわよ。」
「ありがとうございます。」
　そう言って、アバンは穏やかな眼差しを目の前の子どもたちに注いだまま、口を閉ざした。
　ヒュンケルとマァムの間には、４人の子どもがいるが、一番上の男子は、成人すると、カール王国の騎士団に入隊した。その兄に会いに、下の３人がカール王都まで遊びに来ていたのだ。
　フローラは、子どもたちの様子を見つめるアバンの横顔にちらりと視線を送った。愛おしそうな、そしてどこか懐かしそうな眼差しを子どもたちに向けていたが、フローラには、それが泣き出しそうな面差しにも見えた。
　フローラは、夫に声を掛けた。
「アバン。」
「はい。」
「・・・懐かしい？
　４０年前みたいに。」
　その示された時間の巻き戻しに、アバンは苦笑した。彼が目の前の光景を見つめながら、そこに別の風景を重ねていることを、長年連れ添った妻は見抜いていたのだった。
「・・・フローラには、何でもわかっちゃいますね。」
　アバンは、困ったような笑みを浮かべ、呟いた。そして、うっすらと涙を浮かべた瞳に子どもたちの姿を映しながら、頷いた。
「こうしていると・・・あの頃を思い出します。・・・まだ、私も騎士団にいた頃を。」
　アバンの目に映る真新しい騎士団の制服を身に纏った青年は、ヒュンケルとマァムの血を色濃く受け継いでいた。その彼の、短く刈り込んだ母譲りの髪が、４０年近い時を巻き戻す。
　桃色の髪に、カール騎士団の制服をまとった後姿は、彼の祖父の若かった頃を、時間を超えて切り取ったようであった。
　その彼が、幼い末の妹を抱き上げる。マァムに生き写しの幼い少女を。
　プライベートガーデンの美しく整えられた花壇の間に、ふたりの桃色の髪が、花のように咲き誇っている。穏やかな冬の日差しが降

り注ぎ、その花のような色合いにいっそう鮮やかな色彩を添えていた。
　アバンは、呟いた。
「・・・まるで、ロカがマァムを抱き上げているようですね・・・。」
　フローラは、しばしの沈黙の後、そっと相槌を打った。
「・・・ええ・・・そうね。」
　ふたりの記憶の中のロカは、いつも若者の姿をしていた。
彼は、年をとらなかった。
　ロカが世を去り、３０年以上のときが過ぎたが、アバンの中には、昨日のことのように鮮明に、この王宮で、彼と訓練を重ねていたころの記憶が残されていた。
　過ぎ去りし日々の思い出は、懐かしく、そして、残酷なくらい否応なく、その時間はもう戻らないのだとの事実を突きつけてきた。
　アバンは、そっと目を閉じた。
　そして、思い出をかみしめるようにしばしその余韻を味わっていたかと思うと、彼はふっと息を吐いた。明るい声色で妻に話しかけた。
「しんみりしすぎちゃうのもよくありませんね。せっかくです。ちょっと手合わせしてきましょうか。」
「手加減してあげなさいな。」
「おや、手加減してもらうのは私の方ですよ。私ももう５０過ぎです。若者の力にはかないませんよ。」
「貴方の場合、年をとって、より老獪さが増しているわ。」
「・・・それ、褒めているんですか？」
「もちろんだわ。」
　夫婦として過ごしたときが長くなれば、互いに似てくるとはよく聞くことだ。
　即答したフローラの言い方が、まるでかつての自分のようで、アバンは苦笑するほかなかった。

　アバンは、若き騎士団員に近付くと、彼の名を呼んだ。
「ルーイ。」

末の妹を抱きかかえたまま振り返った桃色の髪の青年は、アバンの出で立ちを見て、声をなくした。
「・・・！
　えっ、先生・・・？」
　そして、彼ははっとすると、すぐに言い直した。
「あっ、いえ、殿下。」
「勤務以外では、先生で結構ですよ。以前から、私のことはそう呼んでいましたものね。」
　呼び方はさておき、ルーイは、アバンの手にしていた２本の剣に驚いた。もちろん、稽古用の鈍らだ。アバンは、そんな若者の様子を気にもせず、彼にそのうちの１本を差し出した。
「どうぞ。
　久しぶりに、稽古をつけてあげますよ。」
「・・・！」
　まだ彼が幼かった頃は、ネイル村にお忍びに来たアバンに稽古をつけてもらったことが何度もあった。だが、ほんの遊び程度のものだ。勇者アバンの武勇伝は、ルーイが幼い頃から、それこそ、暗唱するほど聞かされていた。ましてや、いまは、アバンは、カール騎士団員たるルーイからすれば、最も高位の上官に当たる立場の人物だ。
　そのアバンに、直々に稽古と言われ、ルーイは息を飲んだ。彼は、抱き上げていた妹を下ろすと、アバンの差し出した剣を手に取った。
　若者の引き締まった表情に、アバンは満足げに笑みを浮かべた。
「１本勝負といきましょうか。私も高齢ですから、手加減してくださいね。」
「・・・御冗談を。覚悟を決めるのは俺の方です。」
「さあ、どうでしょうかね。」
　ふたりは、互いに剣を手にして間合いを取った。お互いに向かい合い、腰を落として剣を構える。
　その二人の様子を、ルーイの弟妹たちが見つめていた。
「おおにい、がんばれー！」
「先生、やっちゃえ！」

「兄さん、大怪我、確定・・・。」
「うるさいぞ、お前たち！」
　弟妹からのあんまりな声援に、ルーイは声を荒げた。
　アバンに追い付いてきたフローラは、苦笑するほかなかった。
「仕方ないわね。
　ふたりとも、準備はいいかしら？」
　フローラの言葉に、アバンもルーイもうなずいた。
　フローラは、両者に確認をすると、真っすぐに右手を上げ、立ち合いの火ぶたを切って落とした。
「はじめっ！」
　途端に、ふたりともが大地を蹴った。たちどころに剣戟の音が響く。
　一合、二合。
　果敢に攻めているのは、若いルーイではあったが、アバンは、最小の動きでそれを受け止めていた。
　アバンの身体に触れそうで、触れられない。
　押し切れそうなくせに、留められる。
　ルーイは、攻撃を繰り出すたびに、苛立ちを募らせた。
　何度目かの打ち合いの後、アバンは、後ろに飛んで間合いを取った。
　さっと逆手に剣を持ち換え、その剣を背中に回す。独特のその構えは。
「アバンストラッシュ・・・。」
　立ち合いを見守っていた上の妹がつぶやいた。
　その次の瞬間、アバンがにやりと笑みを浮かべ、足を踏み込むと、背中に回した剣から一撃を放った。
「アバンストラッシュ！」
　だが、その一撃を予測していたルーイは、己の剣でその一撃を受け止めた。矢のような一撃に押され、後ろに引いた足に力を込め、何とか踏みとどまる。
「ぐっ・・・！」
　うめきながらも、かろうじて耐えきったその姿に、アバンは感嘆の声を上げた。

「あら～・・・もう耐えられちゃいましたか・・・さすがです。耐久はヒュンケル譲りですね。」
　飄々としたその言葉に、ルーイは不敵な笑みを浮かべた。
「・・・ここまでですか、先生？
　なら、今度はこっちの番です・・・！」
　ルーイは、大きく剣を引いた。そして、アバンの胸元に狙いを定めると、真っすぐに突き技を繰り出した。
「先生、覚悟っ！！」
　だが、次の瞬間、ルーイは違和感を覚えた。
　アバンが剣を捨てた。
　まるで無防備に構えを解き、両手を下げる。
　一見、胸をさらけ出したかのようなアバンのその態度に、だが、ルーイは背筋を凍らせた。
　おかしい。
　何かが違う。
　これは、踏み込んではいけない・・・！
　とっさにそう感じたものの、遅かった。
　ルーイは、剣を突きだす自分を見上げるアバンの目が笑っていることに気が付いた。
　若者の一撃が、アバンの身体に突き刺さる。
「先生ッ！」
「アバンっ！！」
　見守るフローラたちの悲鳴が上がった。
　次の瞬間。
　アバンが、再び剣を手に取った。
「アバンストラッシュ！」
　アバンの剣が空を切り、ルーイに襲い掛かる。まともにその一撃を受け、彼は吹き飛ばされた。
「うわあああっ！！！！」
「兄さん！」
「おおにい！！」
　どさりと、その長身が地に落ちる。
　背中から墜落し、ルーイは、苦痛にその面を歪めた。

弟妹たちが駆け寄る中、彼は辛うじて、肘で己の身を起こした。
「な・・・何ですか、いまの技・・・。」
　アバンは、いつも通りの柔和な笑みを浮かべたまま、何でもないことのように答えた。
「無刀陣ですよ。」
「無刀陣？」
「はい。あえて相手の技を受け、その隙をついて、攻撃を返す技です。」
「・・・！」
　ルーイは、息を飲んだ。当然のようにアバンは答えているが、その技がいかに困難であるのかは、剣士である彼には肌で感じられた。
　老齢に差し掛かっているはずのアバンが、若い彼の攻撃を受けて耐え、その隙に最大威力の技を打ち込んだのだ。
　飄々とした笑みを絶やさずに、アバンは、ルーイに語り掛けた。
「私は、多くの人にアバン流の武術を教えましたが、この無刀陣を習得した人はたった一人だけでした。」
　アバンの言葉に、ルーイは、彼の知る最強の戦士の姿を思い浮かべた。
　均整の取れた逞しい背中に、銀の髪。いつも追いかけて来たその姿が、脳裏に浮かぶ。
　まるで、その思考が見えているかのように、アバンは頷いた。
「貴方のお父さんですよ。」
「父さん・・・。」
　ルーイは呟いた。
　アバンは、若き騎士団員に手を差し伸べると、ゆっくりとその身を起こさせた。
「貴方はまだ若い。もっと鍛錬して、強くなってください。
　私のことも、ヒュンケルのことも・・・貴方のおじいさんのことも超えていくように。」
　アバンは、目の前の青年の向こうに、彼と同じ髪の色だった親友の若き姿を思い浮かべていたのだろうか。この青年の祖父に当たる

男であり、そして、若いまま世を去った自身の親友だった男のことを。
　アバンは、青年に語り掛けた。
「ルーイ、貴方の名には、異国の光の神の名が織り込まれています。それは、貴方の生きる先が、光に満ちているようにと、皆が願っているからですよ。」
　晴れた冬の陽が、温かな光をプライベートガーデンに投げかける。それは、この先の己の人生を切り開いていく若者への祝福だった。